

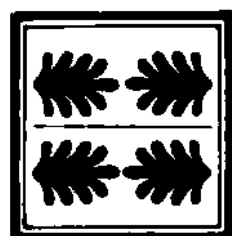


モザイク

ロマンの寄木細工

森村誠一





講談社文庫

モザイク
ロマンの寄木細工

森村誠一

昭和53年9月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国オフセット株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社国宝社

© Seiichi Morimura 1978

Printed in Japan

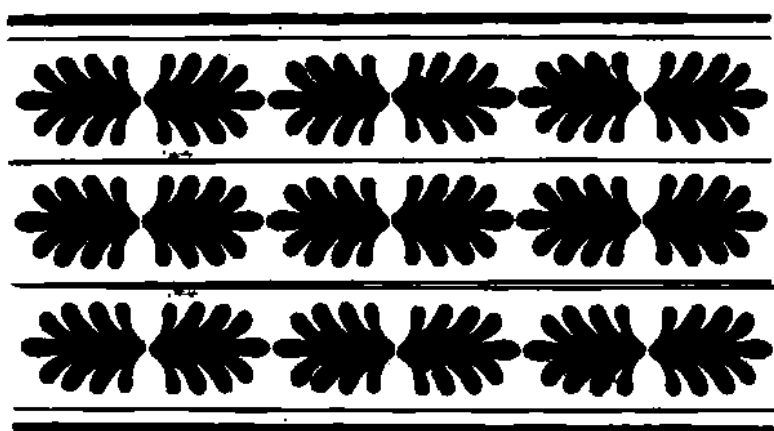
0195-361187-2253(0) 360円

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

講談社文庫

ロマンの寄^モ木^ザ細^イ工^ク

森村誠一



講談社

目次

第一章 旅と山 日常性の脱出こそ旅の精神

地図と地刻表の中に旅ははじまる	11	心に沁みたさすらいの旅	12	わが心の草原	15						
山旅の思い出	22	青春の追憶と早春の山	25	旅で知り合った女性	28	スキーと女性					
と	31	青春のふるさと	34	夢の形	36	穂高の雷	38	銀座へ向ける姿勢	40	カモ	
られた観光	43	ヨーロッパ観光セット旅行	45	未来をかいま見る旅の味	50	私の通					
過したソ連	51										

第二章 人生論 自分の石をケルンに積む

人生の堆積	59	美しき挑戦の年代	60	青春とは計算のない日々	64	劣等生の自信	66
人生の戦友	70	償いきれぬもの	74	人生の引越し風にインスタント	77	超高層	
からの「さらば人生」	79	生きがいと自殺	81	基礎の威力	82	アイちゃんの数学	83
わが珍友	86						

第三章 愛と性 愛はエネルギーの交換作用

愛はひとり占めに、憎しみは堆積しよう 93 欲望という名の不毛な密室 98 人間とし
ての連帯感で結ばれる 101 心の触れ合う手紙 103 食べなかった据膳 107 わが青春の
女友達 109

第四章 小説観 「一度だけ」のトリックに賭ける！

実作者のメッセージ 115 推理作家と現場作法 124 推理小説と人生 125 推理小説の苛
酷さ 128 私の推理小説 130 頭脳の有給休暇はない 132 物質文明の集約 135 読書遍
歴——自己流の「暴読」で 137 作品論 141

第五章 サラリーマンとは…… 脱サラのために個性を開発しよう

仕事について——ホテルマンの経験から 189 サラリーマンの抵抗 192 ネジ人間の悲
哀 195 員数社員 201 猫の家出 204 間接的実力の驕り 208 “直接人間”への転業 210
サラリーマンの嫉妬心 213 職場の花はなんのハナ 215

第六章 団地住まい 団地的諸悪を脱するには……

物質文明の終着 221 美しい地名 223 団地からの脱出法 225

第七章 私の経歴 私を作家にした脱サラの執念

私と一月 239 三十年の星霜 240 ああ青春——青き霞に烟る 242 十年ひと昔あの頃の私 249 鉄筋の家畜人 251

第八章 食べ物・音楽 e t c もりソバと好きな音楽さえあれば

食べ物の思い出 285 幻の食物 287 青春の味 288 最高です「冬のもりソバ」 290 酔中酔余 292 私の好きなレコード 293 引出しの中 296 現代分身術 297 生身の赤穂浪士群像 300 エロチシズムのプライバシー 305 人生の方向づけを 309 人間万博館 314 十一の胴元 317

第九章 山の詩 若き日の山仲間の唄

雷鳥の唄	320	風の別離	322	しろがねの雨の彼方より	324	ケルンの唄	326	ピツケル
の唄	328	夏山	330	薫風の山	332	山の便り	334	縦走路の唄
霧の唄	340	雲の故郷	342	枯木の唄	344	兎の死	346	下山路
山仲間の唄	356							雲の平
								旧き
								五色ヶ原
								雲

文庫版のためのあとがき 360

ロ
マ
ン
の
寄^モ木^ザ
細^イ
工^ク

第一章 旅と山

日常性からの脱出こそ旅の精神



地図と時刻表の中に旅ははじまる

地図には遠い邦への憧れを誘うものがあり、時刻表には丸山薫の「汽車に乗ってアイルランドのような田舎へ行こう」という詩のような郷愁がある。

どこかへ行こうか？ とそぞろ旅心をそそられるとき、私はまず地図を開いて、その土地を頭に画く。高い山々の連なり、野のひろがり、湖、森林や川や、見知らぬ町のたたずまい……さまざまな地図記号が私の想像をかきたてる。

未知の土地は、憧れあるがゆえに旅行の目的地となり得るのである。通勤先や商用出張地のように、憧れのない土地は移動の対象にしかない。だから未知の土地に旅立つ前に、私はせいでいその土地への憧れをそそるようにしている。その重要な「興奮剤」が地図なのである。

そして時刻表によって、自分がその土地に入っていく時刻を確認するときは、まだ家から一歩も出ないのに、すでに私は旅立っている。旅には未来を覗き見るような、心のワクワクするような喜びと、何となく心細いおもいが交錯するものだ。時刻表は私にとって未来の時間であり、その汽車に身をあずければ確実に憧れの土地に運んで行ってくれる魔法の書物なのだ。

忙しくて旅行ができないとき、私は魔法の書物を開いて旅立つ。好みの場所と好みの時間に自

分を措いて、空想の旅を愉しむのだ。

「出発から帰着まで」をキャッチフレーズに、すべての手配は他人まかせで、行程の大半を高速交通機関によって省略することの多い最近の「旅行」は、「旅」でないばかりか、私に言わせれば、すでに旅行ですらなく、場所から場所への「移動」にすぎない。

このような「移動」においては、旅につきもののハプニングはほとんどない。忙しい現代では、旅にあらざる旅行も止むを得ない場合が多いが、せめて移動でなくするために、私は地図と時刻表を愛用しているのである。

心に沁みたさすらいの旅

最近、仕事に追われて、旅に出たいという意欲はあっても、なかなかそのチャンスに恵まれない。学生時代はよく旅に出た。だいたい一カ月に一度くらいの割で旅をし、春と夏の休みには、少なくとも十日間以上の長い旅をした。学生時代のことだから、旅費はもちろん十分でない。登山以外の時は、予定らしい予定も立てなかった。

旅へ出たいという気持は、突然衝動のように湧き起るものである。得てしてそのような場合は、がんじがらめに身を縛られて、絶対に旅に出られないような事情にある時が多い。拘束されていることをよく知っているから、余計にその状態から脱出したいのである。

大学四年の一月の末、卒業試験が迫っている時、私は旅へ出たい猛烈な衝動にかられた。今この衝動にまかせたら、確実に卒業できなくなることがわかつている。特に行きたい所の当てはな

い。ただ現状から脱出したかったのである。

当時私は就職先は決まらず、学業成績はなほだ振わず、まことに絶望的な状況にあった。私が旅への衝動にかられたのは、その絶望状況から逃れたかったからかもしれない。この場合の旅は、現実からの逃避であり、一種のヤケ酒のようなものである。

だが、世の中の健全な人々は、そのような危険な酒は飲まない。若気のいたりというか、私はその時その酒を飲んだ。なにもかも放擲^{ほうてき}して旅へ出てしまったのである。

その時のコースは、今思い起すと、よく無事に越えられたものだ。とゾツとするのだが、松本から雪の深い野麦峠を越えて高山へ行き、名古屋から奈良吉野山を経て大峰山を縦走して、瀟峽^{しょうきやう}へ下り、熊野川をプロペラ船で下って、新宮から伊勢志摩を廻って帰って来た。まったく行き当りばったりのコースで、言葉通りのさすらいの旅であった。帰宅した時は、試験はとうに終り、私の落第が確定していた。

私はその旅の間、少しも楽しくはなかった。現実には直面せず、それから逃避した後めたさが、旅の間中、私一人世の中から疎外されているような感じを与えた。

だが、その旅を今になってふり返ってみると、旅につきものの虚しさや寂しさやしみじみとした孤独感があつた。「心に沁みるような旅」とはあのよつな旅を言うのであろう。

思うに、旅にはあてどない寂しさと未知の国への憧憬がなければならぬ。行く先に何があるのかわからない、どんなめぐり逢いをするかもわからない、明日はなおさら今夜の宿さえ決っていない、旅費はもろろん十分でない、このような不安を救い補うものは、憧れだけである。これがあるがゆえに、旅には未来を垣間見るような心のとときめきが感ぜられるのである。

予定と予算によって精密に組立てられている旅は、旅行ではあっても旅ではない。旅は日常性から脱出し、そこになにがしかの自由とハプニングがあるからこそ旅と言えるのである。

出発から帰着まで旅行社がお膳立てして、バスに乗って一まわりして来るような団体旅行は、“移動”であつて、旅行ですらない。

私達は、あまりにも日常性の壁の中に閉じこめられてしまったのではないか。時折、衝動のように湧く旅へのいざないを、危険な衝動として圧殺し、ただひたすら日常の安手の安泰にしがみついている。

現代人は、責任と予スケジュール定と約アポイントメント 束の大義名分のもとに、現実から逃避する勇氣すら失つてしまった。誰もが逃避する勇氣を持たない時に、あえてそれを行なうのは、逃避ではなく、脱出である。昨日のとおり今日、今日のとおり明日をくり返している限り、危険はない。だが、日常の正確な反復の中には、未知の途方もない展望も得られない。

重要な会議のある朝、あるいはあなたは自身の結婚式の日、あるいは絶対に取り消せない約束に臨む前などに、ふいに旅立ってみてはどうだろう。あなたが居なくなつたことによつて世の中がどう変わるだろうか。人間の運命とは良くも悪くも日常性からの脱出によつて変ることが多い。そのつもりで家を出れば、最寄りの駅から、あなたを未知の邦くにへ運ぶ乗物がいくらでも出ているのである。

わが心の高原

私は山歩きが好きである。あくまでも山歩きであつて、山登りではない。

学生時代に、日本アルプス、八ヶ岳、奥秩父、その他上信越や東北の名だたる山は、ほとんど歩いたが、その大部分は単独行であり、夏の尾根をのんびりと歩いたものである。

私にとって山は、困難を押し進めるための可能性への挑戦ではなく、あくまでもレジャーの楽しみを求めるためのものであつた。冬山の氷壁や、悪絶無比の岩壁の登攀は、私の柄ではなく、また体力的にも不可能であつた。第一、可能性の限界に対する挑戦は、なにも山へ登らなくても、この下界でいくらでもできると思っていた。

だいたい私は、目的とスケジュールに縛られた旅は嫌いである。旅は、余裕の上に成立つてこそ、ほんとうの味わいがあると思つてゐる。その意味で、高原の旅は、あてどないさすらいに、最も適しているように思える。地平の果てまでも続く牧歌的な草原、その果てを限る青く烟つた長連の山脈、その山脈まで地続きのように見えながら、その間には大きな断層がある。断層の底に下界の町があり、未知の平原が山麓を青い霞に溶かした山脈と熔接する。雲が自分よりも、足下に浮かぶ高原は、文字通り雲の上の楽園であり、そこを旅行者は、高原の空のように心を虚しくして、足の向くまま気の向くままにさまよい歩くのである。

高原というと、私はいつも五月の美ヶ原を想う。松本平を隔てて、長い岩の襖のように連なる北アルプスの山脈には、まだ銀糸を散りばめたような残雪が懸り、高原のあちこちの萌え出たば